

なごみつつうしん

発行日：平成28年8月22日（第20号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「何かを失えば、何かプラスになる。」この言葉を教えてくれた YUMIE さんの物語です。

所長 小沢 浩

～本当の幸せは、

悲しみの中に

あるのかもしれない～

読売新聞に書かれていた YUMIE さんの話を紹介しよう。

YUMIE さんは生まれつき耳が聞こえなかった。聴力は補聴器がなければ、ジェット機の轟音がやっとわかる程度。補聴器をつけても完全には聴き取れず、小さいときは常に人の陰に隠れている子だった。聞こえない世界に閉じこもらないように、お母さんは発音の仕方を根気よく教え、小学校から聾学校と並行して健常児が通う学校にも行かせた。耳の事でいじめられることもあった。そんなときには、



「他の人にできないことを見つけて見返してやりなさい。」

と厳しい言葉をかけた。

「ラーメン食べたいな。」

小学校4年のとき、教師が声を出さずにつぶやいた言葉が突然わかり、そのころから相手の話すことが理解できるようになり徐々に人と交わるようになっていった。18歳、将来の目標を持ってずにいた専門学校生のときに、運命的な出会いがあった。ボディーボードである。ボディーボードとは、足ひれ（フィン）をつけて、長さ1メートルほどのボードに腹ばいの姿勢に

なって波に乗る競技である。友人に誘われ、みようみまねで波に乗ると心地よく「霧がぱっとはれたような感覚」を味わった。

「海は平等、誰も払いのけない。この世界で頑張ろう。」

とプロになる決意を固めた。その2年後、耳鼻科の医師から人工内耳手術を勧められた。手術をすれば聴こえるようになる。でも激しい運動はできなくなる。ボディボードをあきらめなければいけない。YUMIEさんは、今のままの自分でいることを選んだ。29歳の時、2度目の挑戦でプロテストに合格。難聴は自分をここまで頑張らせてくれた「ダイヤモンドのような宝物」と聾学校の後輩たちに伝えている。



105歳で亡くなったおじいちゃんの音松さんは、「誰も恨んじゃだめだ。その人の声が聴こえなければ、心で聴け。」いつもそう言い続けてきた。おじいちゃんが亡くなり、部屋を整理していたら電話帳をみつけた。何本も線が引いてある電話帳。耳鼻科の欄だった。YUMIEさんは、色々な病院から「音松さんいますか。」とよく電話があったことを思い出した。YUMIEさんの耳を治そうと必死だったおじいちゃん。YUMIEさんは、その電話帳の前であふれる涙を止めることができなかった。

「何かを失えば、何かプラスになる。本当の幸せは、悲しみの中にあるのかもしれない。」今、YUMIEさんがみんなに伝えている言葉である（読売新聞多摩版2012.1.4）。

「奇跡がくれた宝物ーいのちの授業ー」
（クリエイツかもがわ）より

